

境界遊戯。

再録集



R-18



すっごく良い!!
やっぱり服は破いて
正解でした!!

おおおっ!!

.....!!



ふざけんなこのっ
何よこの格好!!
変態!! 変態!!

はあ

ちん

ニハ

ふ

ア

まあまあ

へ

あ.....
あんたが...

ちやんと写真
撮りたいっていうから、
わざわざ
来てやったのに.....

ア

そんな事
言つて

こゝんなに乳首
ピンピンにしちやつて…
ほら、えーりんんに貰つた薬で
イカせてあげるから♪

嫌あ！

その薬…ツ
強すぎるから
苦手なのに…！

ぬりゃん

やだっ！
乳首は…

そんなに
擦り込まれたら
すぐイっちゃう
じゃない！

大丈夫、
ちやあんとお尻も
使つてあげるから、
安心してよ

駄目ツ、そこ
いちばん駄目スツ！
今挿れられたらおかしく
なっちゃうっっっっっっっ

ぬちゃううう

びびび

びびび

ぶるるる

びび

びび

びび

びび

びび

びび

すっすっ

いつ...!?

もう、私の調教のせいで
すっかりお尻弱く
なっちゃってる……！
すぐに挿れてあげる
からね！はいっ

ぽんぽん

はははははは
あ~~~~♡♡

あつ、ぐう……
これ、す……
きちやう……！

ど

は

あああ



とろー

ふふ…紫だって、普通に写真だけ撮られて帰る気じゃなかったでしょ？

あ…

とろー

とろー

とろー

もうちよつと、楽しまない？

あ…文あ…

はー

はー

最低！最低！
アンタのカメラなんか壊してやるわよ！

いちゃ

えー、楽しんでた癖にー

嘘つけ！
アンタが私の普通の写真撮ってるトコなんて見たこと無いんだから！

私達がこういう関係になったのも、私の写真がきっかけなんだしさ、感謝して欲しい位よ

写真撮りたいのだから愛ゆえだしさー！

よくそんな事が言えるわね！
この変態！

さ、散々卑猥な写真ばかり撮って…普通の写真なんて

ま、全く撮ってくれないじゃない！

…撮ってるわよ？

ん？何？
撮って欲しかったの？
言ってくれば良かったのに

なくんて、いつも気づかれないように撮ってるだけなんだけどね…





再録集	境界遊戯。
-----	-------

お品書き

書き下ろし

3 p

境界遊戯。

9 p

境界遊戯。式の弐

22 p

境界遊戯。式の参

42 p

境界遊戯。式の肆

54 p

く紫様冬眠中く

く紫様ドM化計画く

深夜

博麗神社
霊夢の部屋

だ、駄目よ！
やめて紫！

ふ……

んっ

ちゅっ

んっ♡

おまい

キキキ

も……
霊夢ったら
照れちゃって！
知ってるのよ？
魔理沙がこーりんと
付き合いだしたって。
身体がそろそろ
寂しいんでしょ？

もう……
こんな事する為に
呼んだんじゃ
ないんだから……

そ、それはまあ……
いつも魔理沙とは
してたけど……

キキキ

キキキ

キキキ

りん&紫、熱愛

あのさ紫！
ソノ気になってるん！
悪いんだけど、
本題。

あ…

これ、
どういう事？

？

え…

えええ！

な…っ？
何よこれ！
こんなの
事実無根よッ！

そ、そうよね！
これ魔理沙よね？

ドーン

よかったあ、
2人共りんに
遊ばれてんのかなって
心配しちゃった

あ…あの時だわ！
あのバカ記者！
同じ金髪だからって
普通間違える？

そりや、私も
あの場に居ただけど…
ああもう！

えっ、それって
どういう事？

話は後！
とにかく今から文には

お仕置きよッ！



妖怪の山
温泉

でねー！

かほーん

元々霧森堂には取材に向かつてたんだけど、紫か中に入ってるのが見えて、覗いたら抱き合ってたわけ！

こんな特ダネは初めてよ！
文々。新聞の歴史に残る快挙と言ってもいいわ！
あーいい気分！

魔理沙とコーリンで噂になったのにねー！
でもあんな記事いいの？

いーのよー！
今まで私の新聞を蔑ろにしてきた罰よ！
これで皆もつと興味持つてくれるしね

えー？
仕返しされても知らないわよ？

報復か怖かったら記者なんてやつてられないわ！

な、何かしら…？
下半身がへんだわ
お湯に浸かってない
みたいなの…？

…あれ？

きゅー！



私の能力って
本当悪戯するのに
便利よね〜♪

まさか下半身だけ
こっち来てるなんて
思わないでしょうね
ぞこまー見ろ！

つん

つん

つん

つん

も〜
紫ってば悪趣味
なんだから〜

つん

ほれほれ！

びん

びん

びん

ほらあ、霊夢も
手伝いなさいよ
せーの！で
イカせるわよ！

うう〜ん

びん

びん

せーの

びん

びん

びん



うっわ〜…
 文…それはないわ…
 それは流石に引くわ…
 中で失禁とか…
 サイター…
 私先にかかるわね

ちつ違うの！
 誤解しないで
 にとりー！！

すっく



ダクダク

おおお
 あああ
 あああ

んあつ！
 イつちや…ああああ！
 駄目っ駄目えええ、
 おしつこ出ちや…っ！
 かき混ぜないでえええっ！



わっわ

びしょ



むわあ♡

ちよつと紫〜！
 なに人ん家の布団で
 失禁させてんのよ！

あらあら…
 本人に後で掃除して
 貰うとしましょ
 まあ、とりあえず…

わっわ

わっわ

わっわ

こつち来なきい文♪
 仕上げにキツツイ
 お仕置きして
 あげるわ！



きゅっ!

はるるる

はま はま はま

はま



久しぶりねえ文。今からたっぷり可愛がってあげるわ

ぐあっ

くす くす

!!

くす



やっぱり...
おかしいと思ったわ!
貴方の仕業
だったのね...

ぐわんぐわん

はんぱん

この変態...!!
何よ、あの記事に
対する腹いせ?

というより、
記事のねつ造に
怒ってるのよね私

はあ？
何よ、ねつ造って…
私そんな事してない！
いやよ、これ以上
何するのよお！

びっ
びっ

カ
ハ

ごめんね文
手伝わないと
紫が五月蠅いのよ
それに責任はとるべきだわ

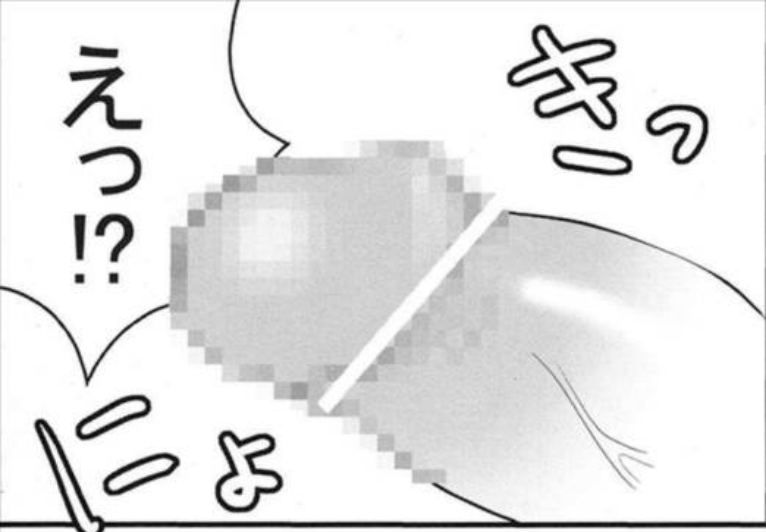
ブル
ブル

く
い

カ
ガ

ハ
メ

やだっ！
どういふ事よお…
霊夢まで何するの！
こんな格好いやああ！



こーりんさんの
極太おち●ぽ
でっす♪



あら、丁度
勃ってるわねえ
オナニーでも
してたのかしら



まだ解らないの？
あんなピンボケの
写真でよくまああ

あの時私も香霖堂に
用があったんだけど

あいつ中で魔理沙と
いちやついてたから、直ぐ
スキマから退散したのよ
この写真のは魔理沙よ

えっ……！

はあー

うっ、嘘よ！
だって私、
本当に……！

うそ……！
確かにあの時焦ってたけど……
じゃあ本当に
私の見間違いだったの？



そっ……
そんなあ……
せつかく特ダネだと思っただのに……
しかも私の記事に
間違いなんて……
記者の面目丸つぶれ
じゃないのよお！

残念だったわね、
あの状態のち●ぽで
犯されまくって
反省することね♪



……やだっ、
おちん●ん
中で太くなっ……

ん、ふう……

ずん



ふあ、あ...っ
んんんっ!!

ひゃっ

はっ
あっ

あっ
あっ
あっ

あっ
あっ
あっ

あっ
あっ
あっ

あっ
あっ
あっ

あっ、あああっ!!
中でビクビクして...
やっ、やだっ!!
はっ...?!

いやあああつ！
こんなに出されてる…

妊娠しちやつたら
どうするのよ！

すすす

そんなの
知らないわよ

産めばー？



そしてその頃
こーりんはー

この状況でも
全く気づいて
いなかった

魔理沙あつ

こーりん？

まさかもう
入ってるのか？

うおっ

びしょ

後日



境界遊戯。式の式

八雲亭



まったく...女の私でもムラムラくる位の良い身体よね

ふふ...これでやっと前回のお返しが出来るわ

盗撮完了了!!



さ〜〜と、バレないうちにムラムラズラからうかし...

らっ!?

お返し



アンタなんか
こころしてやるわよー!



も〜〜
さっきから五月蠅いわねえ…
まだ寝てたいのに〜



え

ひゃんっ



何か
生えて…

ヤダこれ、
もしかして…

っ!?

つ
つ
つ

ぽろぽろ



手荒なまねして
御免なさいね

んん
ううう!!

だけど、勝手に進入した
貴方だって悪いのよ?

あし

あし



解ってるわよ。
文ちゃんの事探しに
来たんでしょ?
大丈夫だから、
心配しないで?

んん!?

んんうう



紫様が責任持って
可愛がって
あげてるから!

!?

す

びり

♡♡♡♡♡

私が満足するまで
言っ事きく約束でしょお?
でなきや『ソレ』治して
あげないんだからさあ

あ・や・く・く・く♡
ほらあ、いつももみたいに
マツサージ!

3、4、

あら、別に嫌なら
出たっていいのよ?
そんなモノつけて出て
へーキならだけど♡

むちん

それとも...もういつこの
やり方で治す?
何回か人中出し
すれば引っ込む訳だけど...
そんな事させてくれる
相手いるの?

はーはー
はーはー
はーはー

あ、が…っ…嫌ああキツ…ッ！
ちよつと、これ誰の中に…！！

とか言ってみる
テスト

えっ！？

も…も…
文…文…
つ…つ…

こうなる事
解らないの？
お馬鹿さあん

30
0

いり。

嫌あつ！

えっへっへっ♪
誰の中に入ってるのか
知りたい？

あつ…
当たり前よ！

びん

正解は…
こーりん
でしたら♪

なーんて
嘘だけどね

あーあーあー



（カ）

や…ヤダヤダヤダヤダ！
無い無いッありえない！
死んだほうがマシよおッ！



ちよっと、
夕子の悪い冗談
やめてよ……！

嘘じゃない
わようよ

その時
隣の部屋では



あと声大きいから
また口塞がせてね

あくあく…中に
出されちゃいましたね
紫様ってば本当に
悪趣味なんだから…



放置プレイ中...



河童って本当にこういう
エロい道具作ってたのね！
まさにエロ河童！

勝手に
漁るな！

えげつない

ういーん

ほらあ、使い方見せてよ！
折角アンタのだって
バシないようにケツだけ
持ってきてやったんだから！

とろとろ



ごめん文...

キキキ

キキ



うふふ、前から
河童のこういう発明に
興味あったのよね♪
ほらあ、早くしてよ

でなきゃひどい事
するわよ？

わ、解ったわよ
貴方達に何か
されるの嫌だし...

ふん

ふん

ふん

す...



実を言うと
他人で試して
みたかったのよね...
いつも自分で
試すしかなかったし！

ぬ

ふん

ピクッ







ねえ、にとり…
ここは私達で
気持ちよくさせて
あげたいと思わない？

私、紫様のこんな姿
見るの初めてで…
日ごろのうっ憤が
溜まってるせいかな？

なんだか、紫様を
滅茶苦茶に
してやりたいの

きやっ

嫌あつ！
何してるの！

あはは…紫も何か
されちゃってんだ…
私もう気持ち良くて
おかしくなりそ…

ちよ、ちよっとお、そんないきなり…
激しすぎるってばあ！
も、もうイっちちや…



紫のイキ顔、
ちやんと見させて
貰うから！

な、何言ってるのよ
馬鹿あ！ だったら
アンタのイキ顔だつて
見てやるわよ！

じゃあ…
一緒にいく？





う、あ……
来るううう！

あああ
あああ
あああ
あああ
つああ
！



!?

あっ♡

んーんーんー♡

びり
るる

いやあああ！
馬鹿——！

文あああ！
だ、誰に断って
中出ししてんのよ！
許さない！
絶対許さないっ！

だって紫の中
気持ち良くて…
我慢なんて
できないわよ！



紫...そ...

チャーンズ!



治るまで
何発も中出し
してやるわよ!



ゆるからり...
ついでに...
治させて貰うわよ!



ちよ、まさか紫！

あれ？

ま

ぽっ



ちよ、これは無いから！
やめてよ変態ー！！

嫌ああ！

本当に学習能力
ないのねえ

私を騙した罰よ
自分の子でも孕み
なさいよ

びゅー

END

境界遊戯。式の参

紫様、ちよつと
いいですか？

ん？
なあに？

来こね //

先ほど買い物中
永琳さんに
会いました

豊乳エステ始めました！
只今無料キャンペーン中！
永琳先生が特別に調合した香油
で、お肌もつるつるすべすべ！
はしよ：永遠亭 有効期限：8月16日

無料券



こんなもの
頂いたんですけど…
今日までみたいで

びっ ☆

あら、
いいわね！

これ、**当然**
私にくれるのよね？

あ…っ

じゃあ、ちよつと
行ってくるから！

アハハハハ
またね

……

ズ
ズ
ズ

ええ…たつぷり楽しんで
きて下さいね…

ニヤ…

ねえ永琳…

YAGOKORO
エステサロン

ねえ、ねえ、ねえ、

あら、なあに？

ニヒ

マッサージは気持ち良いんだけど、貴女の手つき…何かいやらしくない？

ええー？何言ってるのよ

くすくす

紫がやらしいからそう感じるんじゃないかしら？

くす

でも、そうねえ…そんなに気になるんだったら…

ムカツ

くすくす…



それに…何だろ、身体が熱くて頭がぼーっとしてきた…

ぬ

トロ〜に

や、やっぱり何か
おかしいわよ!

きやあつ!

ちよ...

目隠しなんて
余計エ...

ああつ!

ほら、次は後ろから
してあげるから
うつ伏せになって?

いっせー

いっせー

何をそんなに反応
してるのよ...ちやんと
効果は出てるわよ?

うあああつ!
乳首ダメええ!

ク

いっせー



あれ？
もしかして
感じちやってる？

わわわ

はあっ
はあっ
はあっ

前回の屈辱で、
ちん〇を治すのは紫で！
と決心した文は、
永琳と藍に強力を得てry



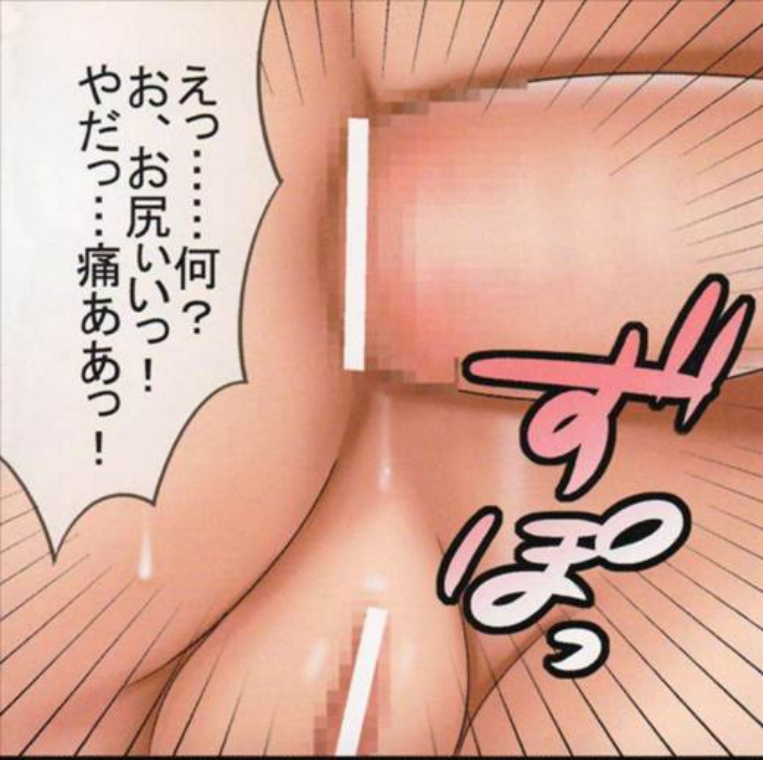
ちよっと、これエステよお？
信じらんない！
貴女みたいな**変態**には調教
が必要だわ： ねえ文？



説明してあげて...

同感！

永琳さんの代わりに
一日助手のこの私が
やっちゃいますね♪



えっ……何？
お、お尻いっ！
やだっ……痛ああっ！

すぽぽ



その声……文？
ど……して……っ！

ぽっ



ぽん

ぽん

びん

ぽっ

ぽっ

ぽっ

あつれ……？
もしかして紫、
お尻処女？

うそでしょ？
アンタ何年
生きてんのよ

ふ、普通
しないわよ！

でもすぐ良くなるわ、
永琳のこの薬ね……
痛いのも恥ずかしいのも
刺激は全部気持ちよく
なっちゃうから！

ふあっ！

そうそう、
今日の計画ね

永琳は勿論、
藍までノリノリで
強力してくれたのよ

う、うそ……！
そんなの……！

え……っ

よっ……！

キ……！！

ふか、私はこの媚薬の
効果を試したかったし、
紫にもちよつと興味が
あったからね

ト……

ああ……っ！

や……もう、
永琳さんには
感謝してますよ！

か

はあ



さてと、
文！

と
3

はいっ

あ
あ

目隠し取ってあげて！
もう完全に抵抗なんて
できないでしょうから
たっぷり愛してあげましょ



嫌あ…つづつして
こんな事…っ！

ア
ル

くすくす、
そうねえ…

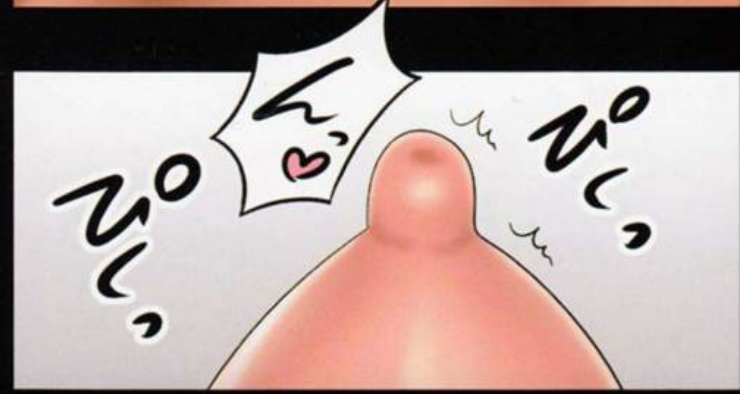


みんな貴女の事が
大好きだからじゃ
ないかしら？

びん

あ

あ
あ



ん
ん

びん

びん



ぬちゃっ

ん♡

ん♡

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ♡

あ...ん...っ!
もう...胸え...
それ以上...は...!

ん♡

ちゅっ

ぬちゃっ

ぬちゃっ

ぬちゃっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ほらあ~

いきたいなら
いってほしいのよ?
ほらほら

あああああ
あああああ
あああああ



びしょびしょ!!!

びしょ
ガク

びしょ
ガク

どろ

どろ



あら紫様

アッ



お帰りなさい…
三日も空けるなんて
随分とお楽しみ
だったみたいです

はっ
ら、藍…っ！ はっ
アン…タ、さいしょ…
からっ…！

はっ

そんな事より…
まだ薬の効果が
切れないみたい
です…

私が満足させて
あげましょうか

はっ
はっ

ああ…私もう、
戻れない…かも…

はっ

はっ
はっ



境界遊戯。式の肆

境界遊戯。 式の肆 紫様冬眠中

「あ……ん……！ いっ……いい加減にしなさいよ藍っ！
も、もう……ずっと相手してやってんだから……それに
……まだ……く、薬の効果が……ひあっ！」
「だから止めないんじゃないですか。紫様……私が今まで
どんなに、貴女の我儘を我慢してきたと思ってるんです？
少し位、私にだって好きなようにさせて下さいよ」
「……やあ、駄目っ……！ そこ……は……！」

そろそろ日も落ちようかという夕暮れ時。

紫の寝室からは、藍と紫の情事に耽る声が聞こえてきてい
た。もう長いことこの状態が続いていて、なかなか終わる
気配はない……。

文は手持ち無沙汰に髪を弄りながら、襖の前でそれが終
わるのを待っていた。

「まったく……いつ終わるのよ……！」

紫から受けた『お仕置』で、ちん〇を生やされたままの
文であったが、何度か人中出しすれば治る為、ずっと紫
の身体が空くのを待っていたのだった。

どうせだったら、自分をこんなにした紫本人に出して治
してやりたいし、二度紫とエッチして、すごく良かったと
いう理由もある。

今すぐ二人の所に乱入して、紫を犯してしまいたい所
であったが……。まだだ。まだいけない。

前回の『ゆかりんを罫にハメて、永琳と一緒にエロエロ

する計画』に協力する代わりに、藍にも良い思いをさせて
やる約束だった。

藍は、今までの紫に対するうっ憤が相当溜まっていたら
しい。永遠亭から帰った後の、薬でフラフラになった紫を
こそことばかりに『愛して』あげているようだった。終わ
るまで邪魔をするなという約束だったし、それに……

「あ、あの……！」

か 細く、可愛らしい声が廊下の奥から聞こえた。見る
と橙がオドオドとした様子でこちらを見ている。

そう、橙を部屋に入らせないのも文の役割だった。

「あの、文さん……まだ終わらないんですか？」

「う……う……ん、ごめんね橙。まだみたい……！」

申し訳なさそうに聞く橙に、文もまた申し訳なさそうに
応える。良い言い訳も思いつかず、なんとなくはぐらかす
事しか出来ない。

橙は心底困った様子で、俯いてしまう。

「だってもう、もう三日経ったじゃないですか……！」

そう、もうこの状態で三日も経っているのだ。実を言う

と、あの薬はかなり長い間効果が切れないらしく、藍も調
子に乗って止められなくなっているようだ。それほど紫の
身体は魅力的だったのだ。薬が切れる前にまた紫とエッチ
したいと思っていた文も、同じく痺れを切らしていたの
だが……。

「藍しゃまに、暫く他のところにお泊りしててねって、言
われて、永遠亭とか、白玉楼とか……ひっく、色々、お泊
りさせてもらったんです……でも、でも……ずっと心配で
……だって藍しゃま、へんだったから……！」

「う、うう……！」

自分が持ち掛けた話だったからこそ、余計に申し訳無かった。こんな純粋な心を持った子に、悲しい想いをさせてしまつて……。

「ひつく、ひつく………だったら、藍しやまと紫しやまは、何をしてるんですか……？ どうして私だけ部屋に入れて貰えないんですか……？ ううっ………なんかへんです………！ うわあああん……！！」

恐らく橙は橙なりに『中で何かイケナイ事をしている』というのには理解しているのだろう。そう思うと胸が痛い。しかしどう説明していいかも解らない。

「え………え」と……

文が悩んでいると、橙の泣き声が聞こえたのだろうか、するすると襖が開き、中から藍が出てきた。

勿論、今まで何かしていたなどと悟られないように、着衣の乱れも無いいつもの様子だ。

「終わつたわよ」

「藍しやま……？ うわあああん……！」

お互いの姿を見つけた藍と橙は、同時に駆け寄るとぎゅつと抱きしめあつた。

「橙………！ おおよしよし、寂しかったねえ！」

「寂しかったです、うっ………藍しやま何かへんな匂い」

藍の狡猾さに半ば呆れながら、これで大丈夫だと文は安堵の溜息を漏らす。それにしても長かった。二人を横目に、そっと部屋の中を覗く。見ると、全裸の紫が布団で蹲りながらピクピクと身体を痙攣させていた。いった直後の、身体が敏感になってしまつてどうしようもない状態のようだ。

それを見て、みるみる文のテンションが上がっていく。

ふふ………橙には申し訳ないけど、今から存分にあげてあげてからね、待つてよ紫！ 後ろ手に縛り上げて河童から大量にせしめてきたエロ玩具で、泣くまで犯しつくしてやるんだから！ 浣腸して放置してやるのもいいわね、上手に私のをしゃぶつてくれたらトイレに行かせてやつてもいいけど、どうしようかしら？

それから、その様子を写真にも映像にも全部収めて、泣きながらやめると懇願するのも無視して、そのまま博霊神社で大上映会を開いてやるわ！ その時紫はどんな顔をしてくれるのかしら？ 皆の前で泣いちゃうかしら？ 薬のせいで、恥ずかしいのも気持ち良くなってイっっちゃうかしら？ そしたら皆が見てる前で存分に犯してあげるわよ！ いいじゃない、紫のそんな姿見てみたいわ！ 気が狂いそうな屈辱よね！ それからそれk

「さて、そういうわけなんで、お引取り願えるかしら」

「………はあ……？」

そこで、突然の藍の我侭発言に、文は妄想から現実の世界に引き戻される。

「ちよつと今何て言つ………え、何ですって？

「ちよ、ま………だつて、私ずつと待つてたのよ？ ひどいじゃない！」

「だつて橙もいるし、もうこれ以上紫様は無理ですよ」

「ひ、ひどい………自分は今まで散々しておいて！ あんた、一見真面目そうな性格してるけど、本当にズルい性格してるわね！ 狐つて皆こうなの……？」

「あらあら、天狗にそんな事言われたくないわね」

「やめて………っ！」

二人の言い争いに、橙が大声で叫ぶ。

「藍しやまのこと悪く言うのは、やめてください！」

それに紫しやまがひどい事されてたのは、私も知っていませんでした！ 藍しやまも自重してください！」

『うっ……！』

橙に涙目でそう言われては、二人はもう黙るしかない。

文も橙の気持ち思うと、徐々に気分が萎えていった。

確かにこのまますぐ紫の部屋でアレコレするのは、気が引ける。

「し、仕方ないですね……今日のところは帰りますけど、また、来ますから……！」

文はそう言い放つと、洪々帰っていった。

まあ良い。今効いている薬の効果もまだ暫くは消えない筈だ。またの機会でも問題は無いだろう。

文はどんよりと曇った空を飛びながら、今度は紫に何をしようかと、またもや妄想の世界に入っていくのだった。

一方、藍はというと、橙に怒られたのがじわじわ効いてきていた。

「自重しろ、か……！」

暫くは紫に何かするのは止めておこう。

橙の前では立派でありたいという、調子の良い考えを持っている藍としては、今だけは反省せざるを得ないのであった。

それに、そろそろ紫は……

* * * * *

「ちよつとおおおおお!! どういう事ですかこれ!？」

「いや……まあ……ごめんなさいね」

藍と橙に追い出された日から暫く経って、再度八雲家を訪れた文だったが、予想外の出来事に啞然としていた。

「と、冬眠ってどういう事よ! 私まだ何もしてないんですけど!？」

「私もそろそろ時期かな……なんて思ってたんですが……すみませんね」

思えば、既に冬の入り始めだった。そろそろ紫の冬眠の時期だという事を、文はすっかり忘れていたのだ。自分の不甲斐無さに、唇を噛み締める。ずっと我慢していたというのに……

「ううう……私のこの溢れんばかりの性欲を、一体どうしろと……。あ……ん紫い……!」

そこで藍は、少し考えるようにして、すぐに笑みを浮かべた。

「そうねえ……そんなに紫様の事好きだったら、眠ったまま何かしちやってもバチは当たらないんじゃないかしら」

「へ?」

一瞬キョトンとしてしまった文であったが、直ぐに藍の言っている事を理解する。つまり……

「え……いいんですか? ほ、本当に? 藍さんてば、後でお仕置されても知りませんよ?」

「まあ、起こさない程度にだったら、悪戯しちやっても良いんじゃないかしら? どうせバレないでしょうし」

「なるほど……それだったら……。ていうか、貴女本当に紫の式なんですか? こんな悪い事……」

「あら、気が進まない? 私としては、面白いから全然良いんだけど」

「いえやらせて頂きます」

文は即答した。

* * * * *

「ん……、本当によく眠ってますね。しかも全裸で」

「ああ、それは先日私が脱がせました」

「藍さん……さては、今までも紫の冬眠中に何かしてましたね?」

紫の寝室。橙の留守を狙って、二人は紫でナニかしようと思考を巡らせていた。

流石に寝ている間に犯すのは気が引けるし、第一、反応が見られないのは楽しくない。精々、存分に辱めるような事をして写真に収める位か……。いや、それでも十分に楽しめる。起きてからその写真を見せられた紫の反応を想像して、二人は思わず顔をニヤけさせるのだった。

橙さえいなければ、藍も後ろめたい気持ちは薄れてしまっているようだ。

「藍さん、ちゃんと写真撮っておいて下さいね」

「解つてますよ」

紫はその、ムチムチとした良い身体を惜しげもなく晒している。久しぶりの紫の身体だ、十分に堪能してやろう。

まずはそつと、その大きな乳房に触れてみる。文の手には収まりきらない程の大きさだ。

むにゅんむにゅん。

弾力があって、それでいて肌はきめ細かく柔らかい。満足するまで胸を揉みしだき、感触を楽しみ終わると、文は早速イチモツを取り出した。パイズリなんかもさせてみるも良いが、文はもつとしてみたい事があった。

「さてと……実は私、紫には一度啜えて貰いたかったんですよね」

今まで一度も口ではして貰っていなかった為、紫の口内の感触に興味があった。

そろそろと、いきり立った自身を紫の口に近づける。

「おおっ？」

ふふ……と小さな寝息が先端にかかる。これはなかなか、興奮するものだ。ふにふにと唇の感触を楽しむと、そつとそつと、亀頭をその口に滑り込ませた。ぬちゅ……。

「うわっ、ぬるっとして……気持ち良い……！」

たまらずズブズブと腰を進め、喉の奥の方までねじ込んでしまう。起きていたならば絶対にさせてくれないような事だ。存分に楽しませて貰おう。

藍曰く、『永琳特性の〇〇薬を飲ませてあるから、ちよつとやそつとでは起きない』との事だ。……その薬の成分は……怖いからあまり聞きたくないな。

まあ、そういう訳だ。少々荒くしてしまっても大丈夫だろう。文は徐々にストロークを開始する。

「んっ……ふ……っ」

腰を動かす度に、紫の鼻から苦しそうな息が抜けて出てくる。それがまた文の興奮を掻き立てた。紫の頭を押さえ

つけ、喉奥に何度も打ち付ける。

「ぐ……！ う、ぐ……ん……！」

喉を突かれて出る苦しそうな呻きも、文の気持ちを高ぶらせる効果しかない。

「あ……はあ……紫い……！ 私、もう……」

今まで随分溜め込んでいた為か、文は呆気なく達してしまふ。文の身体がなびクンビクンと痙攣すると、紫の口の中にどくどくと精液が注ぎこまれ、そして……

「……んくっ……」

「うわっ、飲んでる！ すごいっ！ 絶対、起きてたら飲んだりなんてしてくれないもの！ うわ……感激！」

「口の端から精液が垂れてるのも、またエロいですね……（パシャパシャ）」

藍も夢中でシャッターを切る。

「ねえ藍、これからも時々来ていいでしょ？」

「橙がない時だったらいいですよ」

「やったー！ 冬って寒くて嫌いだったけど、こんな楽しみがあるんだったら悪くないわ！」

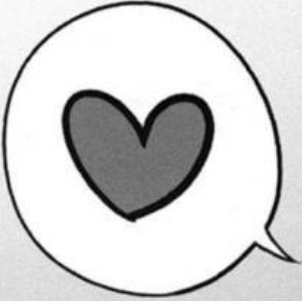
「まったくですよ。これがなかったら私、ストレスで死んじゃいますもの」

* * * * *

それから、どの位経っただろうか……。冬の間文は紫の所に何度も通い、自分の欲望を発散させていった。



んん



んん

んん♡

んん
んん

当然、回を増すごとに行為はエスカレートしていく。文達は「寝ている間に出来る、あらゆるプレイを楽しむぞ！」と相気意込んでいた為、紫の身体は何度も何度も屈辱的な行為を受け入れる事になった。

寝ている間に犯すのはどうも……と最初はやや遠慮がちな文も、今となつては遠慮も何もない位、行為に勤しんでいた。とは言つても、まだちん〇が治る程はしていないが……。

最近紫が外の世界から持つてきた、様々な衣装に着替えさせて写真を撮るのに夢中で、紫は露出度の高い恥ずかしい衣装や、外では「セーラー服」だとか「体操着」だとか言われている衣装を着せては写真に収めていた。

どういふ場で着るものなのか、細かい事は解らなかつたが、どことなく紫の年齢に不釣り合いなその姿は、存分に文の扇情を煽り立てた。

しかし当の本人は、そんな屈辱的な仕打ちにも、意識がない為気づかない……。

* * * * *

そうしている間に、日々はどんどん過ぎ去っていった。梅の花が咲き始めた頃、藍はふと主人の目覚めが近い事を察知し、文にある提案をした。

「文さん、そろそろ紫様の目覚めが近いみたいです。起きないようにする薬も、そろそろやめてあげた方がいいかもしれませんね」

「えっ？ ……それは…残念ですね…」
「そこですすね。とっておきのショーをご覧に入れまじょうかと……」

「今回は文さんがいたから、色々楽しめましたけれど、いつもはちよつと違う楽しみ方をしていたので……。ああ、少々ヒドいかもしれませんが……引かないで下さいね？」
「そう言うと、藍はそそくさと奥の部屋へ入っていった。」

「えっ……え？」
藍の言っている事がイマイチ理解できず、文は首をかしげる。一体何をするというのだ。
暫くして戻ってきた藍の背後には……

「！」
何人もの人間の男達がそろそろと付いてきていた。

その男達の目は空ろで、どことなく心あらずといった感じだ。

「あの……藍さん、これって……」
「冬が来る前に貯め込んでいた人間達なんですけど……薬でちよつと、ね」

「また永琳さんの薬ですか……。でも……これは……」
思わずゴクリと生唾を飲み込む。

この男達が全員で、紫を……。藍も随分とヒドい事を思いつくものだ。今までも寝ている間にこんな大勢に犯させて、それを楽しんでいたというのか。

しかしそんな文の啞然とした様子に気にも留めず、藍は平然として男達に命令を下す。

「じゃあ皆、まずは紫様にご挨拶でもどうぞ。存分にかけちゃって下さいね」

藍のその一言で、男達はイチモツを取り出し、それを近づけるようにして紫の顔を取り囲んだ。

男達もまた、一種の催眠状態か何かのようで、自分の快樂とは無関係に、ただ機械的に藍の命令に従っているだけのようであった。

「シュッシュッシュッ」

作業でもするかのようになり、一定のリズムでモノを扱き出す。快樂は通常通りに感じる事が出来るらしい。息を荒げ、紫の頬に、おでこに、唇に、先端を押し付け、先走りの液を擦り付けていく。

「う……わあ……」

あまりにも卑猥な光景に、文はムラムラムきてしまったのだらうか、もじもじと身体を揺すらせる。

そうか、藍はいつもこんな事を……。見ると、嗜虐的な笑みを浮かべている藍がいる。普段は真面目で従順そうに見えるが、流石に紫に仕えているだけある。案外エグい性格をしているのだった。

「ぐ……うっ」

よほど溜まっていたのだろうか、男達は小さく呻くと、次々に射精していく。その量はとても多く、今日はいつもの衣装を着せられていた紫であったが、顔だけでなくそのお気に入りの服までもが精液で汚されていく。

「エ……エロいですね……！ 私の征服欲がどんどん満たされていきますよ」

「うふふ、実は更にとっておきの衣装があるんです。ほら貴方達、紫様の服を脱がせて、着替えさせて頂戴」

その一言で、男達は即座に紫の服を脱がし始める。随分従順に命令を聞くものだが、人間ごとき操るのはそ

う大層な事でもない。この者達もまた、藍の良いように扱う玩具のようなものなのだろう。

藍が筆筒から水色の服を取り出し、男達に手渡す。

「これはですね、向こうの世界で『園児服』と言われる、幼児に着せる為の服なんですよ」

「ほー、それはまた犯罪的な……！」

「紫様にはそれはもうお似合いになると思って、大事に取っておいたんですよ。冬は長いですからね。何十年も、どんな新しい楽しみ方があるのか、ずっと考えてきましたから。……あ、もう終わったみたいね」

紫の『お着替え』が終わったらしい。

文は振り向き、園児服とやらに着替えさせられた紫を見て、なるほどと把握した。サイズが小さいせいもあるのだが、確かに子供が着る為の服に見える。名札にはひらがなで『ゆかり』と書かれてあり、これはなかなか、そそのものが……。

「じゃ、紫ちゃんはまだ小さいから、優しく犯してあげてね」

早速、男達は紫を起き上がらせて座らせると、両手を掴みイチモツを握らせるようにして扱き始めた。

両手が使えない余りの男達は、口へ、髪へ、胸へ、ぐりぐりと擦り付け、徐々に自身を硬くさせていく。幼児の衣装におよそ不釣り合いなその光景に、文も興奮を隠せないのであった。

そして十分に硬さを増した一人が、紫の短パンを横にずらし、自分の上に座らせようとする。他の男達も手伝い、紫のアソコをあてがう様にして徐々に腰を落とさせていき……。



見る見るうちに、紫の秘部に男のものが埋まっていく。ずぶ……ずぶ……。既に文のもので十分にほぐされたそこは、容易くそれを受け入れてしまう。

「ふ、ううう……んっ」

紫の口から、少し苦しそうな声が聞こえた。

続いて、男がゆるやかにピストンを開始すると、はあ、ああつ、と小さく喘ぐような声が漏れ始める。

眠っているにも関わらず、ナカを抉られて感じてしまっているのだろうか。

「あら、いやらしい夢でも見てるのかしら？」

藍が紫の顔を覗き込む。頬を赤らめながら、はあはあと息を荒げている様子は、とても眠っているようには思えなかった。

「園児のくせに感じちゃうなんて、いやらしい紫ちゃんですわ〜」

はちきれそうな園児服の上から、藍がむにゅむにゅと紫の胸を揉みしだく。ぎゅつと押し掴みにすると、乳首の突起が突き出て、そこも硬くなっているのがよく解った。

「んっ、ん……ふ……」

男がピストンする度に、紫の身体がゆさゆさと揺れる。

文はその光景を、しっかりと写真に収めていく。寝ている間に園児服を着せられ、大勢の男達に犯される紫……たまらない！

「できたら動画で保存しておきたかったわね……『紫ちゃん、はじめてのお遊戯』ってタイトルで売り出したら良いと思うんだけど」

「くすくす、香霖堂にでも置いて貰えば売れるんじゃないかしら」

「あ、それ良いわね！ 園児服だけじゃなくて、もっと色々としりずでできそうね」

藍が持っている外の世界の衣装は、非常にレパトリーが豊富であった。

「だったら、もっと面白い衣装も持ってるわよ」

「本当？」

一体どうやって集めているのだろうか。藍はまた筆筒の中から、何か布切れのようなものを取り出す。しかしそれは、『衣装』と呼ぶには余りにも心もとないものだった。

「ん？ 何それ……」

「外の世界では、エロ水着って言われてるそうですよ」

「へえ、水着にも色々あるんですね。ていうか、エロッ！」

その水着は殆ど生地が無く、最低限の部分を隠す程度の面積しかなかった。いや、それでもまだ足りない位だ。

少し動けば、乳首や性器も丸見えになってしまう程だ。

「ほらほら貴方達、次はこれに着替えさせて！」

そして……

「おおおおおっ、これは……！」

『エロ水着』に着替えさせられた紫を見て、文は興奮を隠せない様子で、藍からカメラを取り上げると入念に様々なアングルで写真を撮り始める。

外の世界の人間達は、一体どれだけ変態なんだ！

着せる前は、乳首と秘部をギリギリ隠せる布はあるように見えたが、いざ着せてみると少しズレがある為、周囲か



ん

ふっ
ふっ

ゆかり

ふっ
ふっ

ふっ
ふっ

ふっ
ふっ

ふっ
ふっ

ふっ
ふっ

ふっ
ふっ

ら軽くはみ出ししている。

「これは良い……！ すごく良いものですわね！」

「気に入って貰えたみたいで良かったわ」

正直、エロいなんてものではない。

確実に全裸よりも恥ずかしい……。こんなものを着ている写真を撮られたのだ、もしかしたら一生紫の事を揺すれるんじゃないか？

「さあ皆、ガンガン犯しちゃって！ 紫様はこゝんなもの着ちやう痴女だから、何したって良いのよ？」

藍の言葉で、先ほどより一層興奮した男達が、紫に襲い掛かる。その行為は容赦なく、口へ、膣へ、肛門へ、穴と穴へ挿入を開始する。

「あっ待って！ アナルは私専用なんだから！」

肛門へ挿入しようとした男を、文は力づくで止める。前回処女を奪ってやったココは、他の人には譲りたくない。

「藍、いいでしょ？ 混ぜて」

「勿論ですよ」

「よし！ 犯る！」

待ってましたとばかりに、文が参加する。

膣内に挿入し始める男の動きに合わせて、文も紫のアナルに先端をあてがう。それから男の動きに合わせて、同時に奥まで貫いた。

「ああああ……！ キツツイ……！」

入り口のキツさに、文の男根がぎゅうぎゅうと締め付けられる。膣内にもモノが入っている為、余計キツくなっているのだ。

しかし、何度も出し入れすればこなれて来るだろう。

文は無遠慮にガンガン腰を動かす。膣とは違うこの感触

もまた、とても気持ちが良いものだ。このまま奥まで突いて、ナカで出してやろう……。

などと、文が思考を巡らせているその時だった。

「ん……あ……？」

パチリ、と紫の目が見開かれる。

一瞬、文の動きが止まるが、男の方は構わず腰を動かしている。

ズコ、ズコ……

「……………」

最初はぼやんとしていた紫だったが、徐々に状況を把握していき、表情が変わっていく。自分が大勢の男達に犯されていくと理解した瞬間。

紫は絶叫した。

「あ……あああああっ！？ 嫌あああっ何してんのよアンタ達っ！ 痛いっ！ 抜いてよ馬鹿あ！」

「おはよー、紫♪ 大丈夫よ、またすぐ気持ち良くなるってば。入れたばっかだからまだ痛いかもしれないけど……」

痛がる紫を、文は待ってましたとばかりに、ぎゅっと後ろから抱きしめる。藍から見たら暴れないように押さえつけているようにも見えたが、紫はそもそも葉がまだ効いていてそこまで力を出せない。文は急に意識を取り戻した紫が愛しくなり、思わず抱きしめてしまったのであった。

「文っ……！ また貴女の……！ もう、絶対に許さな……」

「紫様、落ち着いて下さい」

「んんんっ！」

ふいに藍が紫を振り向かせ、口写しで何かを流し込ませた。くちゆくちゆと満足するまで舌を絡ませると、口を離す。

「ふは……」

「けほっ……！ 藍、何を……」

「もっともつと気持ちよくなるお薬ですよ」

「……あ、貴女まで……！ つあー！」

急に文と男の動きが激しくなり、紫は思わず気を持っていかれる。

「藍グッジョブ！ 責任持って貴女の『紫様』をイかせて差し上げましょう！」

「宜しく願いますね」

「いやっ、ちよ……！」

何とか逃れようとする紫だったが、丁度今は騎乗位のよな体位になっている為、周りの男達にガッチリと肩や太股を押さえ込まれ、いくら動こうが逃れる事が出来ない。

薬のせいでも入らない……。

動いたせいで水着はすっかりズレてしまい、乳首や大事な部分は最早丸見えであった。

「ひ……ぎ……！」

背後からの文のえぐるようなピストンに、最初は痛みを感じていた紫だったが、徐々に入り口がこなれていき、痛みも和らいでいく。

勿論、追加の薬の効果が効いてきた為もある。あらゆる刺激を快楽に変えてしまう永琳のこの薬は、凄まじい効き

目だった。

「う、うううん……」

紫から口から、痛みとは別の呻きが漏れ始める。その様子を見て、文はニヤニヤと笑みを浮かべ言葉攻めを開始する。

「痛がってたのに、随分と気持ち良さそうねえ。そう言えば紫い、今更だけど……貴女程の人がこないだの永遠亭での計画、気づいてないなんておかしいわねえ？ あれ、何か解ってた上で来てたんでしょ。本当はアンタ、相当な変態なんじゃないのお？」

「違っ……本当に、知らな……っ！」

「すかさず、藍も紫苛めに混ざる。」

「あら、そうなんですか？ エステって聞いて、エッチな想像膨らませてたんじゃありませんか？」

「あ、貴女が持ってたから取り上げたくなっただけよ！

馬鹿な事言わないでっ！」

「ええ……？ 本当にそうなんですかあ？」

「違うに決まってるじゃない！ 私は変態なんかじゃ……」
そこで、くすくすと笑いながら、文と藍が顔を見合わせ

た。

「……？」

紫は咄嗟に二人が何か企んでいるのを察し、不安げな表情を浮かべる。

「変態じゃないですって。この中で一番変態ですよねえ」

「あ……、もう見せちゃっても良いかしら」

「な……何よ……」

藍がその場にあつた、大き目の手提げからいくつかのフ

「随分沢山ありますからね、どれから見せたらいいのやら……」

「どれでもいいですよ、本人に自覚がないなら解らせてあげなくちゃですね」

「うふふ、紫様あ」

何枚かの写真を持って、藍が近づいて来る。

何の写真だ……？

身に覚えが無い為、紫は半ばきよんとしていた。

しかし……

「ほら、紫様ってば、こゝんなもの着ちゃう変態なんですよ」

「……」

藍の持っている大量の写真を見て、啞然とする。

寝ている間に撮られたであろう、様々な衣装で犯される自分の写真……

「や……だ……何、これ……い、今すぐ燃やしなさい！でない……」

こんな事、起きていたら絶対に許さない……。一体何を考えて、何が楽しくてこんな事をしてるのだ。

紫の中で、一気に怒りがこみ上げてくる。

だが、一瞬にして湧き上がった怒りも羞恥心も、この状況では全く意味を成さなかった。文がニヤニヤしながら、怒涛の紫苛めを開始する。

「でない……何？ イッチャいそう？ 自分のエッチな写真見てイッチャうの？」

「ひ……っ！？」

文の手が紫の陰核に伸び、皮の上からこねくり回す。続けて、更にねちっこい言葉攻め。今の紫の状態なら、

ちよつとした刺激を与えるだけで、恥ずかしささえも快樂に変わっていく筈だ。

藍が目の前に一枚の写真を晒し、文が嬉々として解説を始める。

「すぐぐぐぐ良く撮れてるでしょ。アソコもどアップで撮っちゃった。色も形もハッキリ解るでしょ？ ほら！」

自分の性器をまじまじと見せつけられ、紫の顔がみるみる赤くなる。

「いや……あ……」

それと同時に、全身にぞわぞわと湧き上がる快樂……。薬が本格的に回ってきたようだ。紫の感覚が完全に支配されていく。

「歳のわりに綺麗な色してるのね。それに……こうして見ると、紫のクリって結構小さいわね。触つてるとちゃんとコリコリしてるの解るけど」

「……い、言わないでえ……」

「言うに決まってるじゃない、こんな楽しい事ないわよ！ねえ、この写真のおま○こ、貴女はずっと大事に使ってきたのかもしれないけど、寝てる間に好きにされちゃったのよ？ もういっそ私達のものにさせてよ。好きな時に犯してあげるから。ああ勿論、私たちの好きな時にね」

「……うう……」

「貴女が嫌がるようなプレイもガンガンしてあげる。泣いて喚いたって絶対に許さないわ。そうそう、ついさっき思いついたのは……貴女を、全裸にして首輪つけて連れまわすの。媚薬をたっぷり飲ませてからね。お尻には犬の尻尾付きパイプでも入れてやろうかしら。それで、おま○こを濡れ濡れにさせた貴女を、幻想郷中散歩させるわけよ！」

濡れ濡れにさせた貴女を、幻想郷中散歩させるわけよ！

皆の前でおねだりしてくれたら、挿れてあげても良いけど……皆どう思うかしら？ すっごく引かれるか、全員にレイプされるか、どっちかよね？ 紫は後者の方がお望みかしら？」

「あ……ああ……あ……」

立て続けに言葉で責められ、最も感じる部分をこねくり回され……紫の中の怒りだとか恥ずかしいだとかいった感情は、全く違うものになっていった。文の鬼畜な言葉攻めにも、紫の身体は反応してしまう。

全身を電流がかけ巡り、そのどうしようもない位の快楽に悶絶する。

「あ……あ……もう気持ちよくてどうしようもないって感じねえ……、イっちゃっていいのよ？ 二本挿し気持ちいいんでしょ？ ほらあ！」

「……だ、めえ……！」

文が乱暴に腰を動かし始め、紫の身体は更に強烈な快楽に襲われる。

紫自身も、あの薬が効きまくっているのが解る。頭では駄目だと思っている筈なのに、身体がそれをどうしようもなく求めてしまっている。言葉とは裏腹に、全身がそれを欲している。

もっともつと文に触れて欲しい！

お尻もおま○こも、乱暴に突きまくって欲しい！

「あつ……あつあつ……、駄目、何かキちゃうっ！ やめ……！……！……！……！……！……！」

「ん？ 何て言ってるか解らないわね」

そこで、文はピタリと動きを止める。

「え……！」

「何？ 今やめて欲しいって言ったの？」

紫は赤面した。

やめて欲しい、自分でそう言った筈なのに、肯定の言葉が出て来ない。もうすぐイきそうだったのに、ここで寸止めなんて酷過ぎる……。

「べ、別に……何も」

「ふん、じゃあやめて欲しくないって事？」

「違……！」

「なら、やめちやおつかなく」

「い、や……意地悪……しないでよ……！」

背後から見えなかったが、紫のその泣きそうな声に、文は思わずドキリとする。きつと今にも泣きそうな顔をしている事だろう。自身が更に熱を帯びる。

くそ、ここで『おねだり』をさせるつもりだったのに、こつちがもう我慢出来ない。

文はたまらなくなつて、行為を再開した。

「しょうがないわね……！ はあ、はあ……紫い……！」

「あつ……んん！ あ……文あ……！」

紫は思わず腰をくねらせ、その感覚を堪能する。男のもの、文のものが交互にナ力を抉る。段々と動きが激しくなつていき、紫はたまらず嬌声を上げ始める。

一旦おあずけされてしまった為、さつきよりも余計に感じてしまう。無遠慮に打ち付けて来る二人のものが、奥の奥まで届いて来る。一番気持ち良いところが、何度も何度

も荒々しく擦られる……！

「うああああつ！ 凄いつ！ お尻も、おま○こも気持ち良いっ！」

薬のせいで、いつもは嫌うような乱暴な突きが、どうし

いやっ、やめてっ！
駄目え！
出さないでえええええー！



ようもなく気持ち良い！

もつと、もつと……激しくして欲しい！ 何も解らなくなる位、めっちゃめちゃにして欲しい！

「す……ナカ、締まるう……！ 紫、いきそうなの……？」

「い……イっちゃう……！ も、私……あああああ……！」

ビクッビクッと大きく身体が痙攣し、紫は絶叫と共に達してしまふ。その瞬間、紫はぎゅつと文の手を握り、快樂の波に完全に身を委ねていた。

藍も今まで見た事のないような乱れっぷりだった。

いった直後の呆けた表情の紫はたまらなく淫靡で、藍はたまらずに何度もシャッターを切った。

「あああ……はあ、はあ……！」

どうやら潮を噴いてしまったようだ。少量の液体がシーツを汚している。

「ん……紫のここ、ヒクヒクしてる……！」

「あんっ、あ、はあ……す……かったあ……！」

紫は快樂の余韻に浸っているが、まだ挿入している文と男は達していない。

「はあっ、あんっ……待ってて、すぐに私も出してあげるから……！」

「！？」

敏感になってきている紫のナカを、そのまま突き上げる。

「やっ、待って！ 今いったばかりじゃない！ 敏感になつてるのっ！」

「ん……紫ばかりするいわよ。わ、私だって……！」

イって、少し落ち着いたのか、慌てつつもゆったりとした口調で紫は言う。

「わ、わかったわ、じゃあ一旦抜いて、もう一度し直しましょ？」

「何もわかってないじゃない、私は今出したいのっ！」

「やっ！ 駄目え……！」

いったばかりで中を擦られるのは、また少し妙な感覚らしい。薬の効果も合わさって、悶絶している。それをまたもや男達を押さえつけ、紫は絶叫するのだった。

「ほら、貴方もナカに出してあげなさいよ。孕ませちゃえば良いじゃない」

「は……？」

どさくさに紛れて何を言い出すのだ、この女は……！

「やだっ、何言ってるんよ変態！ 馬鹿っ！ 文の馬鹿馬鹿……！」

「暴れないで……もうちょっとで、私達も出してあげるから……！」

「嫌ああああああ……！」

どくっ……どくっ……！」

紫の中に同時に大量の精液が流し込まれる。敏感になりすぎている紫は、その感覚でさえ感じてしまふ。

「あっ……あああ……中に出されちゃってるう……！」

ナカでどくんどくと脈打つ二つのモノ……流し込まれる暖かい精液……。紫は嫌がりながらも、軽く、二度目の絶頂を迎えてしまふのであった。

文と男がモノを抜くと、紫の中からドロリとした白い液体が流れ出る。その光景を、藍は抜き取り写真に収めていった……



Bust

Bust

Bust

Bust

Bust

Bust

紫い…
好きよ…

あん…っ

ん…文あ

* * * * *

「ひぐ……うつく……」

「あれ？紫、もしかして泣いてるの？」

「…別になんか泣かないわよ……っ！」

その後、男達は帰され、ぐったりとする紫を文が優しく抱きしめていた。

拷問のような快楽から解放され、安心してしまったのだろう。薬の効果もあって、感情がやや不安定になってしまっているのかもしれない。

それにしてもこんな紫を見るのは初めてで、文はたまらず抱擁してしまうのであった。

「ごめんね紫、だって貴女が冬眠から覚めるの、待てなかつたんだもん。寝てる間に出来るスキンケアってコレくらいかなって」

「……ッ！ 何がスキンケアよ！ あれだけ外道な事しといてよくも……！ 結局はエッチな事したいだけなんじゃないの！」

こうしてベタベタしてきていても、結局は身体目当てで来ているのは解りきっている事であった。

藍もにこにこ微笑みながら、紫の髪を撫でる。

「ほらほら、例えそうだとしても、お陰様で文さんのちん〇も取れたし良かったじゃないですか」

「何が良かったのよ、意味が解らないわ！ あれは元々私がお仕置の為につけてやったのよ！ それが何で……うう、永遠亭で私が油断してなければ、こんな事には……」

「えへへ、ご馳走様でしたら」

文と藍のお気楽な態度に、紫はイライラを隠せない様子で立ち上がる。

「いい？ 今後、文はここに立ち入り禁止よ。でないと、スキマ送りにするから」

「えへへ！ 待ってよ、私もう紫無しじゃ生きられないんですけど」

「どうせエッチしたいだけでしょ？ だったら他の娘にして貰えば良いじゃない！」

「違うわよ、だって、私は紫の事本気よ……？」

ふいに文は立ち上がり、紫を抱き寄せると唇を重ねた。

「んんっ!？」

深く、深く舌を進入させ、紫の味を堪能する。

紫は最初は面食らった様子であったが、直ちにそれに応じ、お互いに舌を絡ませあった。にゆる…にゆちゆ……。

「ふは……」

「……ん、文……」

不覚にもドキドキしてしまい、紫は思わず顔を逸らす。

「本当紫ってば良い反応してくれるわね……起きてくれて良かったわ」

「……何よ、本気で私の事……好きだっていうの……？」

濃厚なキスに、紫の心は僅かに揺れてしまった。好意を持たれて悪い気はしない。調子の良い事ばかり言う天狗なんか、信じるつもりはなかったのだが……。

「うん、好きよ……紫のその、豊満な身体も、締まりの良いアソコもお尻も、それから……」

「……結局身体が目当てじゃないのよ……」

「……」

やはり、信じるべきではなかった。

刹那、身体が下に落ちるような感覚がし、気づくと文の身体は地面に打ち付けられていた。

「ドサッ。」

「いったあゝゝゝ！」

ゴツゴツとした地面の感触。

うす暗い、洞窟のような場所であった。

「ああもう、冗談だったのに……ていうかここ何処よ」

全裸で放り出された文は、怖々と辺りを見回す。どこか

見覚えがある場所であった。ここは確か……

「えっ!? うそっ、ここ地底!？」

だとしたら、マズい。色んな意味で相当マズい。

その時、奥の方から視線を感じ、文は驚き振り向いた。

緑色の眼をした、見覚えのある顔……。地上と地下を結ぶ縦穴の番人、水橋パルスィであった。

「全裸でさえ快樂を得られるその性癖……妬ましいわ!」

「パルスィさん……! あ、貴女本当に何にでも嫉妬しちゃうの……!? それでいいの!？」

* * * * *

その頃、人間の里では……

橙が膝にちよこんと乗っかると、紫は（まだ敏感になっている為）ひやっと小さく声をあげたが、気を取り直してその可愛らしい猫耳をふにふにしてやる。

藍にも『お仕置』を命じておいたし、これでやっと平穩を取り戻せる。

「とここで、藍しゃまはどこに……」

「ああ、いいのよ藍は。今は人間の里に居る筈だけど、お仕置が済むまで、暫くはクビだから……」

さて、ちゃんと観察してあげないといけないわね……これであの子も懲りてくれるといいんだけど」

「あっ、紫しゃま! 大丈夫なんですか? なんか……色々あったみたいですけど」

居間でお茶を飲む紫を発見し、橙が駆け寄る。久しぶりに紫に会えて、ほっとしているようだ。にこにここと微笑む

橙に、紫もまた微笑み返す。

「橙! 別に何も無いわ、大丈夫よ。膝においで」

「おおおおお……これ、は、すごい……」

そこには、人間の里の中でも人の多い、店屋の並ぶ通りに繰り出そうとする全裸の藍の姿があった。

全裸で人間の里に出没してこいという紫の命で、素っ裸で出てきた方がいいが……。

「こ、これは癖になっちゃうっ！」

紫の意図とは裏腹に、藍は初めての経験に快楽を感じていた。自分の裸を、今まで玩具のように扱ってきた人間たちに見られてしまう……。

くやしいっ……でも……ビクビクッ！

「ま……また、冬眠中にヘンな事したら……、同じ事させるぞ、って紫様は仰ってたけど、これは……私にとってはご褒美ですうっ！」

どうやら藍は、周囲が思っていた以上に変態だったらしい。新しい快楽に出会い、打ち震えていた。

恐らく紫は藍がそばに居る限り、一生穏やかな冬は迎えられないのであろう……。

おしまい

各漫画のコメント



境界遊戯。

東方にハマってから初めて出した本。
まさか自分で本出す程東方にのめり込むとは、思ってませんでした。
紫の能力をエロに生かせたら素敵だな、って思ったのが最初です。
この頃は文がいちばん好きだったんだよなー。

境界遊戯。式の弐

描いている途中で紫の良さに気づき初め、途中から紫受け漫画に。
気づいたら紫がいちばんの好きキャラになっていました。
私の趣味であり日課であるエロ妄想に、欠かさず紫が出て来るようになる。紫は、エロい。

境界遊戯。式の参

この頃から完全に紫狂いになってしまい、「ババアは俺の嫁Tシャツ」
なんていうおかしなものまで発行してしまうのであった。
もはや紫無しでは生きていられない身体に。
紫+エステも、エロい。

境界遊戯。式の肆

脳内でありとあらゆる紫妄想をし尽くしてきたけれど、
気に入ったネタは、やっぱり本にして出したいわけです。
すごく久々に小説を書きたくなって書いてみたけど、文章が拙すぎて
発行した後恥ずかしくて読み返せなかった。
だけど紫+エロ水着は最強に、エロい。



「境界遊戯。」 2007/12/31 発行



「境界遊戯。式の式」 2008/05/24 発行



「境界遊戯。式の参～紫様下M化計画～」
2008/08/16 発行



「境界遊戯。式の肆～紫様冬眠中～」
2008/10/05 発行

+ 描き下ろし
presented by 少年病監